

大宜味村史

シマジマ

本編



①シークワサー (青切)
②シークワサー (クガニー)
③村花・村木 シークワサー
④村鳥 メジロ



⑤

⑤糸芭蕉とフクギ
⑥饒波の琉球藍



⑥



上：塩屋から宮城島のカンサガニクを臨む
下：橋ができる前の渡し船（昭和7年頃）

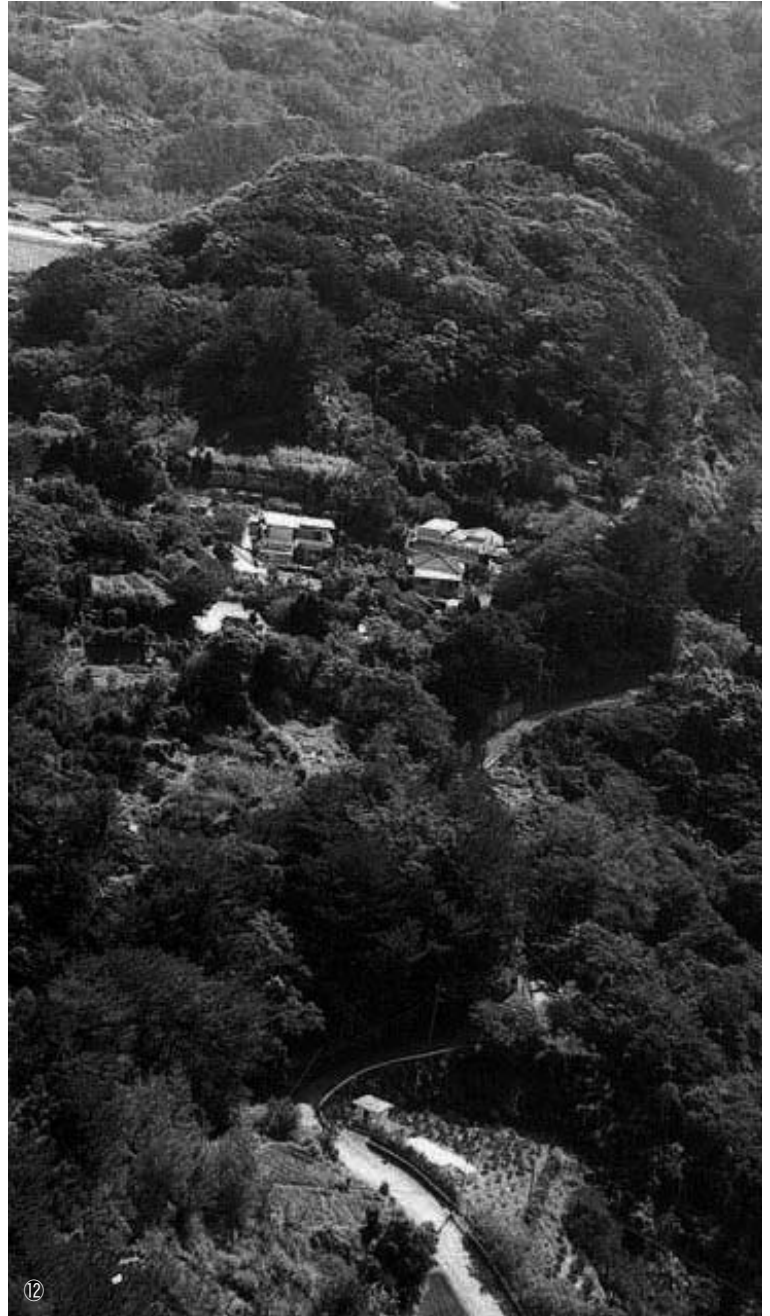


上：山原船の船着き場（宮城区提供）

下：塩屋湾

白浜からみた風光明媚な塩屋湾。大宜味村の白浜（手前）と塩屋（対岸右側）は目と鼻のあいだである。白浜からの距離は2里あまり、昔は舟を利用したが、今はバスで18分の道のり。工事中の塩屋大橋がみえる1962年





- ⑫根謝銘（ウイ）グスク全景
- ⑬グスク内の神アサギ
- ⑭根路銘海岸





⑭



⑮

- ⑭塩屋湾のウングミ ハーリーの漕ぎ手と迎える女性達
- ⑮ヤファサギでの祭祀
- ⑯ナガリ（兼久浜）での祭祀
- ⑰豊年踊り（ウドウイマール2日目）



⑯



⑰



18

- ⑱ 発展する結の浜（塩屋湾外海埋立地）
- ⑲ 結の浜公園
- ⑳ 塩屋湾外海埋立竣成の碑
- ㉑ 平成 28 年 4 月開校の大宜味村立小学校・中学校



20



19



21



シマ — 集落 — の宝物



田嘉里



大宜味



根路銘

屋
古



田
港





白 浜



宮 城

大宜味村史 シマジマ本編

目次

| | |
|--------------------------------|----|
| グラビア | 2 |
| 目次 | 21 |
| 発刊のことば | 22 |
| あいさつ | 23 |
| 凡例 | 24 |
| 大宜味村の地形図 | 25 |
| 大宜味村の地質図 | 27 |
| 大宜味村の植生図 | 29 |
| 地形及び地質の概要 | 31 |
| 第一章 大宜味村のムラの宝物 | 35 |
| 一、大宜味村の遺跡 | 36 |
| 二、大宜味村内のマク | 37 |
| 三、大宜味間切の村の変遷 | 38 |
| 四、史料にみる大宜味のムラの変遷 | 39 |
| 五、大宜味間切の村と役人 | 40 |
| 六、根謝銘(ウイ)グスクと按司地頭と総地頭 | 40 |
| 七、根謝銘(ウイ)グスクの御嶽(ウタキ)とイベ | 41 |
| 八、国頭間切の国頭(クンジャン)は根謝銘(インジャミ)? | 43 |
| 九、根謝銘(ウイ)グスクと集落と村(ムラ) | 44 |
| 十、近世の山原の方切 | 45 |
| 十一、間切番所の移転(田港↓大宜味↓塩屋↓大宜味(大兼久)) | 45 |
| 十二、元文検地の印部石(ハル石) | 46 |
| 十三、間切役人と地租徴収の手続き | 46 |
| 十四、大宜味間切の仙山の種類 | 49 |
| 十五、大宜味間切における猪垣の修築 | 50 |
| 十六、耕作下知方並諸物作節附帳 | 50 |
| 十七、田港御嶽と大宜味御嶽の祠の香炉 | 52 |
| 十八、明治の大宜味間切 | 54 |

| | |
|------------------------|-----|
| 奥付 | 372 |
| 参考文献 | 371 |
| 謝辞 | 349 |
| 津波 | 337 |
| 江洲 | 327 |
| 宮城 | 313 |
| 白浜 | 297 |
| 大保 | 283 |
| 押川 | 267 |
| 田港 | 255 |
| 屋古 | 227 |
| 塩屋 | 211 |
| 上原 | 193 |
| 根路銘 | 173 |
| 大宜味 | 157 |
| 大兼久 | 139 |
| 饒波 | 111 |
| 喜如嘉 | 87 |
| 謝名城 | 67 |
| 田嘉里 | 65 |
| 第二章 大宜味村 各シマの宝物 | 61 |
| 大宜味の歴史年表 | 60 |
| 二一、大宜味間切の神アサギ | 60 |
| 二二、大宜味間切のノロの遺品 | 56 |
| 二三、明治初期の大宜味間切の村の規模 | 56 |
| 十九、『南嶋探験』(笹森儀助・東洋文庫より) | 55 |
| 二十、大宜味間切の宿道 | 55 |

発刊のごとば

新大宜味村史は、過去の歴史を記録し、検証・評価することともに、わたしたちの未来を構想する基本となるものです。

「新大宜味村史事業」は、村民に開かれ、村民主体、村民参加によって取り組まれます。

この度、発刊の運びとなりました「シマジマ本編」においても、たくさんの方の村民のご協力により、村内外へ大宜味村の特色を伝える素晴らしい一冊となりました。心よりお礼申し上げます。

新大宜味村史は、三〇年前に刊行しました「大宜味村史」をふまえ、村民が参加する新しいテーマと方法で進めることを理念に、新大宜味村史編纂委員会が平成二二年一月に発足し、翌年七月に「新大宜味村史編纂計画」を策定。新村史のための調査・資料収集等に着手し、すでに「シマジマ・ビジュアル版わーけーシマの宝物」、「戦争証言集 渡し番ー語り継ぐ戦場の記憶ー」を発刊しました。

「新大宜味村史編纂計画」は、ほぼ一〇年をかけて、次の各編を編集・発刊する計画であります。

前期 「シマジマ・ビジュアル版」「シマジマ」編 「戦争証言集」

中期 「人と自然」編 「移民・出稼ぎ」編 「民俗・ことば」編 「写真集」

後期 「通史」編 「資料」編

自治体としての大宜味村の実体は、一七のシマ（字・行政区）から成り、それぞれ個性と特色があります。これからつくっていく新大宜味村史に共通する基本となるものとして、各シマの歴史文化、自然の特色等を、後世に受け継いでいく「宝物」ととらえ、本書「シマジマ本編」を、新大宜味村史の第三冊として調査・編集し発刊いたしました。

村民にとっても、新発見、再発見が多くあることでしょう。本書が、村民をはじめ多くの人々、とくに若い世代の人々に読まれ、活用されることを願っております。

平成二八年 三月 二八日

大宜味村長 宮城功光

あいさつ

大宜味村では、平成二三年七月に「新大宜味村史編纂計画」を策定し、その計画に基づいて調査や資料収集を行っています。

平成二四年度から「シマシマ・ビジュアル版」「シマシマ編」「戦争証言集」「人と自然」「移民・出稼ぎ」「民俗・ことば」「写真集」「通史」「資料編」等の各編を発刊する計画で、これまで「シマシマ・ビジュアル版」、「戦争証言集」を発刊することができました。

大宜味村は一七の集落で構成されており、「シマ」と呼ばれ村民の心のよりどころとなっています。一七のシマにはそれぞれ個性・特色があり、そのシマに根付く「シマンチュ気質」も人々の中にあります。

大宜味村を理解するためには、まず一七のシマを知ることが重要だと思います。

そのような思いから、この「シマシマ本編」においては、シマごとの歴史、文化、自然、人の繋がりなどを、「シマシマ・ビジュアル版」をより深く掘り下げて調査・編纂しました。

生活の中で、昔はあったけれど今は行なわれなくなったもの、形を変えて行なわれているものなど、時代とともにシマは変化しています。失われつつあるもの、変化しながら継承されているもの、これまでの歴史をふまえて「今」の状況を切り取り、「大切にしたい宝物」として記録しました。

編集に際しましては、たくさんの方々のお知恵やお力をお借りしました。皆様のおかげで、ここに、大宜味村を知る道標となるすばらしい本ができあがりました。心からお礼を申し上げます。

この本が、村民を始め多くの方々の手にとってもらい、「宝物」として親しまれ、活用されることを願っています。

平成二八年 三月二八日

大宜味村史編纂委員会 委員長 米須邦雄

凡例

本書は、私たちが普段生活している一七行政区（字・部落）それぞれの現況・自然・風土・歴史・文化などに関して、村民が、自分たちの地域を見つめ、理解を深め、さらに他の地域への理解が深まり広げられるよう、ひいては、大宜味村の全体像を理解できるように、これまで発表されている文献・史資料及び大宜味村史編さん室で収集・調査・研究し、作成してきた資料を集成したものである。本書の作成にあたっては、次の点に留意した。

- ・各字の概要や組織・行事等については二〇一四年発行の『新大宜味村史シマシマビジュアル版 わーけーシマの宝物』の編纂にかかる調査結果をもとに作成した。

- ・各行政区の呼び方は、適宜、部落・ムラ・シマを使い、人家のまとまってある所を集落・ボール・班等として扱った。

- ・「自然」の項では『大宜味村の自然』（一九九五年 大宜味村教育委員会）をもとに、現状を加味し、簡略化して掲載した。

- ・「遺跡」については、『大宜味村文化財調査報告書第二集 大宜味村の遺跡詳細分布調査報告書』（一九八四年 大宜味村教育委員会）から引用、一部現状に合わせて書き改めた。なお、時代区分については当時の表記をそのまま引用した。

- ・各字の年表は字誌が発刊されているところは字誌を参考に、それ以外は、大宜味村史および大宜味村関係資料等をもとに作成した。なお、年表上の戦争の名称（太平洋戦争・第二次世界大戦・大東亜戦争等）は同一の事柄を指すが、一九四五年六月二三日の記述に関しては特に沖繩戦のことを指すものとする。

- ・数字は一部を除いて漢数字で記した。文章中の単位は読み（音）表記「mメートル・%パーセント」とした。

- ・年月日は西暦を基本に、年号の方が時代をイメージしやすいと思われるところには年号を使った。また、「一九〇〇（明治三三）年」のように、西暦の後に年号を併記している部分もある。なお、中国との関わりが深い明治以前は中国年号を、明治以降は日本年号を用いた。

- ・参考・引用文献・刊行物などは『』内に示し、後に発刊年を記し、引用部分は「でくくり、原文に忠実になるよう注意した。原文の読み取れない部分や欠けている部分は□や◇で表している。なお、その一覽を巻末にまとめて掲載した。

- ・新聞記事については、掲載年と新聞社名を記した。記事の全文から前後の流れやまとまりを考慮して抜粋・編集して「」でくくり使用した。

- ・人名の敬称は省略した。ものや場所の名称で方言名についてはカタカナ表記とした。

- ・意味が伝わりにくい言葉や表現に関しては○内に漢字や読みまたは意味を補足し、説明が必要な場合は（※…）と注釈を加えた。

- ・小字・小地名は漢字（方言・カタカナ）で表記した。なお、文章中の小字・小地名についてはカタカナを優先的に使用している。幾通りかの呼び方がある場合は代表的な呼び方を優先した。

- ・同一の事柄を指す名称や内容が、字によって違う表現になっている場合もあるが、その地域で使われている表現を優先した。

- ・古い写真には可能な限り年代・説明を加えてあるが、年代・詳細などが分からないものについては記していない。

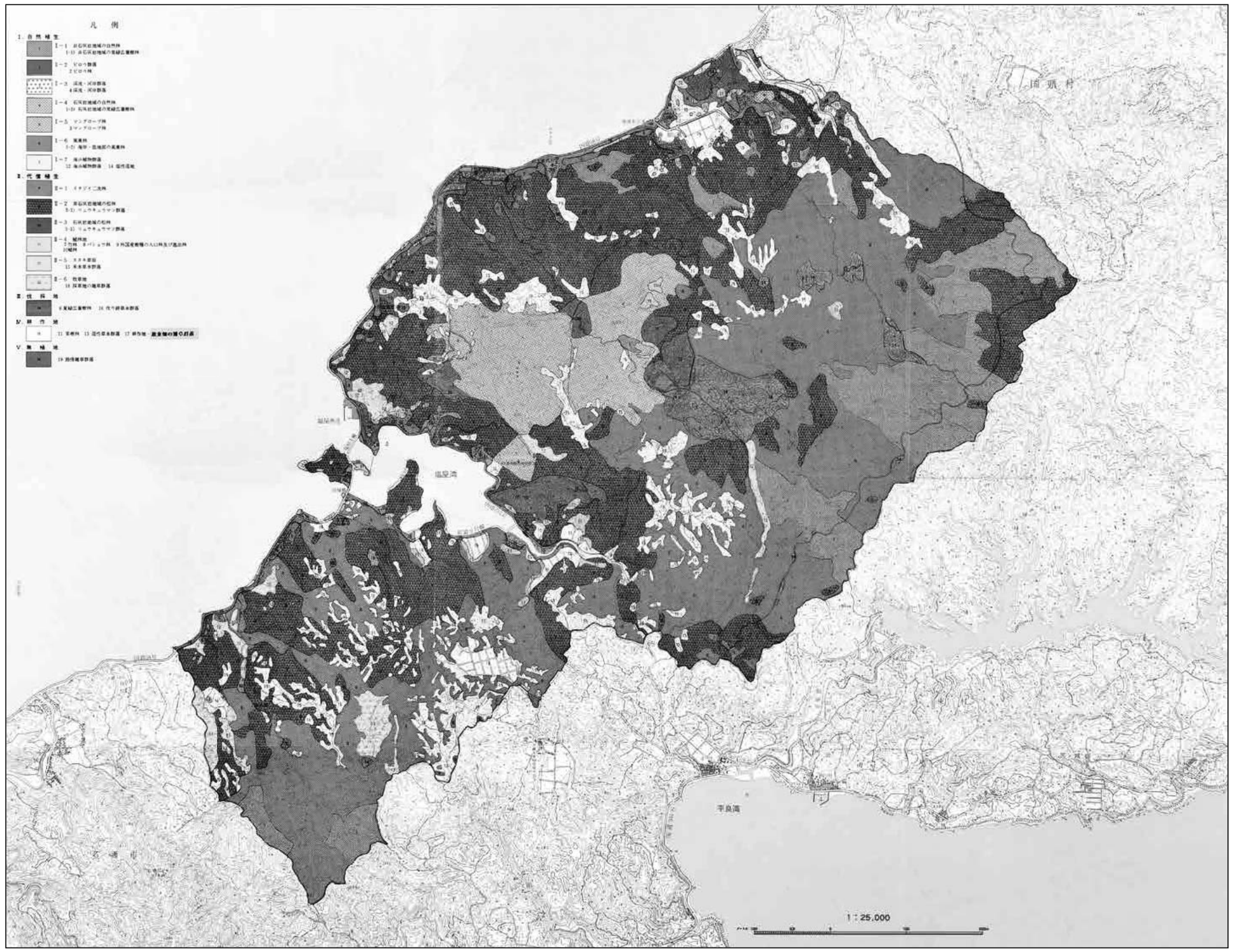
- ・屋号図については、基礎となる資料が二〇〇三年時点のもので、それ以降にできた建物や施設、集落から離れた建物などについても可能な限り書き加えた。屋号の表記は、各字の調査結果を忠実に再現したため漢字・カタカナは統一していない。なお、図記載の屋号は現在住んでいる人を基本としているが、所有権を明示するものではない。

大宜味村の地形図



凡例

- I. 自然植生**
- 1-1 非自然植生域の自然林
 - 1-2 非自然植生域の常緑広葉樹林
 - 1-3 自然植生域の常緑広葉樹林
 - 1-4 自然植生域の自然林
 - 1-5 自然植生域の常緑広葉樹林
 - 1-6 常緑林
 - 1-7 高山植物群落
 - 1-8 高山植物群落
- II. 人工植生**
- 2-1 人工植生域
 - 2-2 人工植生域の雑草
 - 2-3 人工植生域の雑草
 - 2-4 雑草
 - 2-5 雑草
 - 2-6 雑草
 - 2-7 雑草
 - 2-8 雑草
- III. 耕作地**
- 3-1 耕作地
 - 3-2 耕作地
 - 3-3 耕作地
 - 3-4 耕作地
 - 3-5 耕作地
 - 3-6 耕作地
 - 3-7 耕作地
 - 3-8 耕作地
- IV. 水域**
- 4-1 水域
 - 4-2 水域
 - 4-3 水域
 - 4-4 水域
 - 4-5 水域
 - 4-6 水域
 - 4-7 水域
 - 4-8 水域



大宜味村の植生図

地形及び地質の概要

一・地形概要

大宜味村は沖縄島北部、名護市の北約一五キロメートルに位置し、面積が六三・一〇平方キロメートルの山村である。村の中央部に大きく湾入した塩屋湾があり、湾の北部、南部はいずれも山がちな地形である。その山地部をぬっていくつかの河川が見られる。河川で代表的なのは村域東の脊梁山地部を流下し大保集落付近で塩屋湾に流入する大保川（一一・六キロメートル）で、他に田嘉里川、饒波川、平南川などの河川が丘陵部を西側に流下する。各河川は流路延長の短いわりに標高差が大きいため滝が発達し、代表的なものにター滝、アザ力滝、七滝などがある。本村の地形は大きく次の山地・丘陵・低地の三つに分類される。

沖縄島の脊梁を形成する赤俣山、玉辻山を中心とした山地の斜面は、一五〜三〇度の傾斜が一般的で、明瞭な傾斜変換点をもって周囲の丘陵に移行する。また、二畳紀の石灰岩が分布するネクマチチ岳、塩屋富士の周辺には数十メートルの高さの垂直崖や石灰岩特有のカルスト地形が認められ、ネクマチチ岳北東方には立派な円錐カルストが、エーガイには典型的なドリリーネが発達している。

丘陵は南部の江洲原やネクマチチ岳・塩屋富士の西側、喜納・サツパナ付近の高度一〇〇〜一八〇メートルの範囲に発達し、謝名城付近で一〇〇メートル、饒波〜上原付近で一五〇〜一八〇メートル、江洲地域で一〇〇〜一五〇メートルとほぼそろった標高を示す。本地域の丘陵は海岸段丘が浸食されて丘陵化したものと推定される。そのため

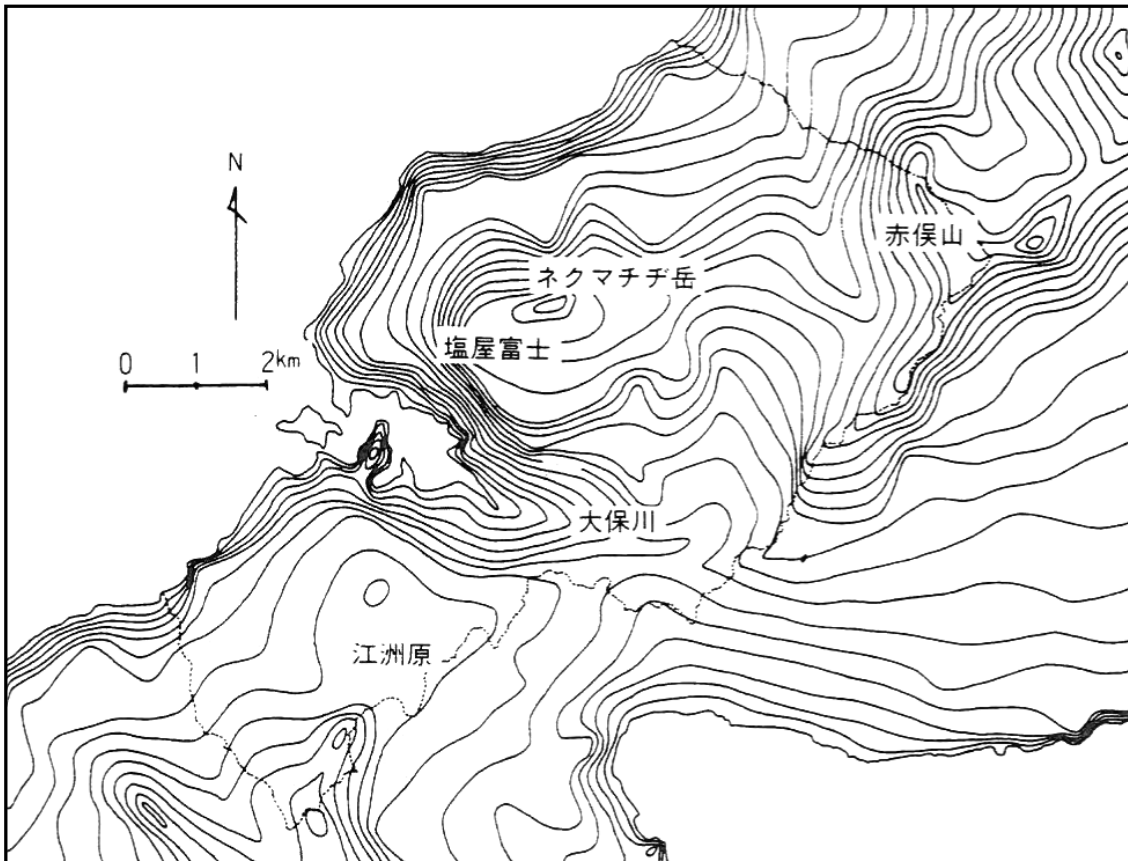


図1. 大宜味村の切峯面図 (注) 等高線は20m間隔

第一章

大宜味村のムラの宝物

大宜味村のムラの宝物

大宜味村の概要

大宜味村は沖繩本島北部の西海岸に位置し、北に国頭村、東側に東村、南側に名護市と接している。一六七三年以前は、津波・平南は羽地間切で、塩屋から北側は国頭間切であった。東側の川田と平良が一時期大宜味間切に入っていたことがある。

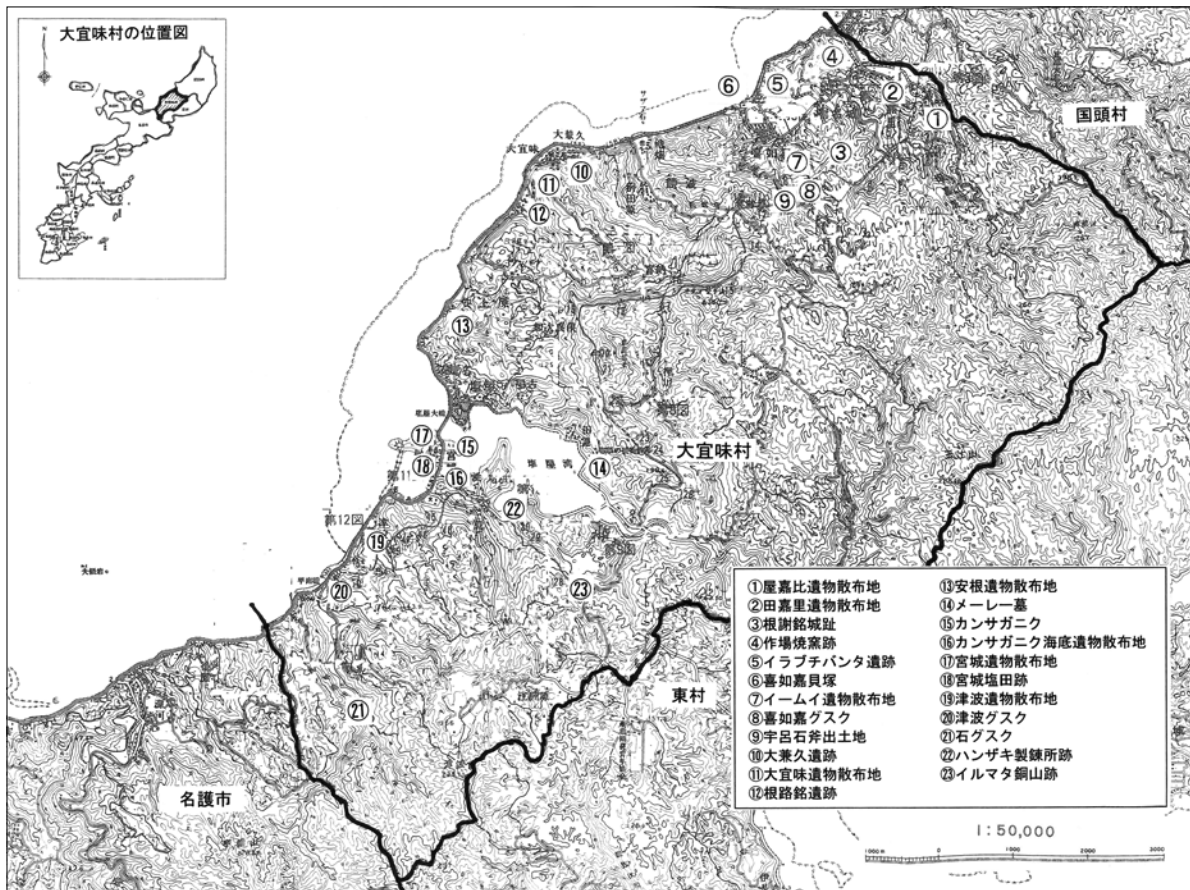
大宜味村のムラ（アザ）集落の多くが海岸沿いにある。近世以前からの村があり、新設村、合併村、分離した村などがあり、それぞれの歴史をもっている。本編では大宜味村全体を通してみていく。

字編では、概要、字別の地質、植相、遺跡や遺物散布地、小字・小地名、人口動態、祭祀、ムラの変遷、屋号、むかし話・伝承などの項目で紹介し、最後に各字ごとに年表をいれ、それらを辿ると各字の動きが実感として伝わってくる。

一、大宜味村の遺跡

『大宜味村の遺跡』（大宜味村文化財調査報告書第二集）は、昭和五七、五八年度に実施した大宜味村所在の遺跡詳細分布調査の成果をまとめたものである。ここで村内の遺跡や遺物散布地などをあげるのには、それら古の人々の生活の痕跡は、大宜味村内に見られるマク、古琉球のムラにつながり、さらに慶長検地以後の近世の村（ムラ）、さらに明治四一年以降の字（アザ）へとつながる流れを見てほしいためである。

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 屋嘉比遺物散布地（田嘉里） | 13. 安根遺物散布地（上原） |
| 2. 田嘉里遺物散布地（田嘉里） | 14. メーレー墓（田港） |
| 3. 根謝銘城跡（謝名城） | 15. カンサガニク（宮城） |
| 4. 作場焼窯跡（謝名城） | 16. カンサガニク海底遺物散布地（宮城） |
| 5. イラブチバンタ遺跡（喜如嘉） | 17. 宮城遺物散布地（宮城） |
| 6. 喜如嘉貝塚（喜如嘉） | 18. 宮城塩田跡（宮城） |
| 7. イームイ遺物散布地（喜如嘉） | 19. 津波遺物散布地（津波） |
| 8. 喜如嘉グスク（喜如嘉） | 20. 津波グスク（津波） |
| 9. 宇呂石斧出土地（饒波） | 21. 石グスク（津波） |
| 10. 大兼久遺跡（大兼久） | 22. ハンザキ製錬所跡（白浜） |
| 11. 大宜味遺物散布地（大宜味） | 23. イルマタ銅山跡（大保） |
| 12. 根路銘遺跡（根路銘） | |



▲大宜味村の遺跡分布図（1984年）（国土地理院地図複製）

二、大宜味村内のマク

大宜味村には各字にマク（マキ）名がある。『わーけーシマの宝物』（新大宜味村史シマジビジュアル版）で述べられている通り、マク名は近世の行政村となる前の集落の単位である。それは近世以前のムラの形、現在の字（アザ）や明治四一年以前の村（ムラ：行政単位）、さらにそれ以前（古琉球）のムラの形を示しているとみられる。

古琉球の時代は「まきり」（間切）の境界線はあるが、ムラの境界線はゆるやかである。近世の村の境界線は元文検地で明確にされたとみられる。

マクはどのように形成されたものであろうか。大宜味村の事例でみていく。マクの呼称は「：マク」である。マクを構成する要素は、さまざまである。一つに「同一の血縁団体、あるいはその部落名」があり、同一族（血族）の人々だけが居住している場合、数ヶ所の門中（血族）でなしている例、血族の人々の集落などがある。

マクと呼ばれる集団ができると、ウタキをつくり、そこには湧泉（カー）があり、いくつもの祭祀場をつくる。そのような習性をもった集団とみてよさそうである。

大宜味村や国頭村で現在でも意識されるマクは、『沖縄の古代部落マキヨの研究』（稲村賢敷一九六八年）で唱えられるマキヨやマキユウと同一で、古代部落（近世以前の部落）のことである。歴史を描いていく場合、近世の村（ムラ）と古代琉球の村（ムラ）の形を背景にみていく必要がある。多くは「マクの意味が何か」で議論がストップしている傾向にある。

国頭村、大宜味村の各字に分布しているマクは、マク↓近世の村（ムラ・シマ）↓明治四一年以降の字（アザ）への変遷をたどっているとの認識で見ていく必要がある。マクの時代と行政村（ムラ）へ移行したときの要素の一つである旧暦のサイクルで行われる祭祀と、土地制度の地割（納税の方法）が近世の村（ムラ）を形づくっている。

『絵図郷村帳』（一六四九年）や『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）などに登場する村の形と、それ以前のムラの形の違いを、大宜味村と国頭村の地域で見きわめていくことができそうである。『琉球国由来記』（一七一三年）の村の内部にはウタキや祭祀、ノ口管轄など、古琉球のムラを形づくっていた要素が継承されている。それらの要素から、近世以前の村と以後の村との違いを解き明かす必要がある。「祭祀は歴史の変化しにくい部分を担っている」との主張は、そこにある。

近世の村の形を作り出したのは、慶長検地（一六〇九〜一〇年）のとき、村位、土地（田畑）の一筆ごとの保有者（名請人）が定められたことによるものである。そのときの検地で原名（ハルナー）をつけている。また村位を定め、田畑からの上納の取りたてで土地にしばりつける制度を敷いている。そのことが古琉球のムラと近世の村（ムラ）との違いを明確にしている。それ以前とは後では村（ムラ）の形は大きく変わる。その後、二回の盛増が行われ、さらに蔡温の元文検地で間切境界、村境界、原境界などが調査され、近世の村（ムラ）の形が整ったとみられる。その目的は税のとりたての効率化でもあった。

大宜味村のマクの分布

【屋嘉比・親田・見里村】

- ・クイシンヌマク（屋嘉比村）
- ・マラクイヌマク（親田村）
- ・ユフツパヌマク（見里村）
- ・ウチクイシンヌマク（野国・野国ナー）
- ・フーシンヌマク（潮原）
- ・ハニマンヌマク（福地）

【根謝銘・一名代・城】

- ・ユナハマク（根謝銘村）
- ・ユダヌマク（一名代村）
- ・クガニマク（城村）

【喜如嘉村】

- ・クガニマク

【饒波村】

- ・ユアギマク

【大兼久】

- ・ユアギマク

【大宜味村】

- ・ユアギマク

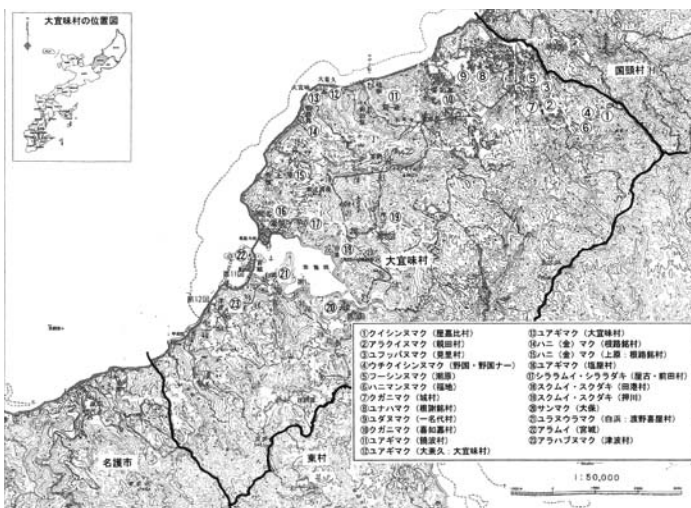
【根路銘村】

- ・ハニ（金）マク

【上原】

- ・ハニ（金）マク

【塩屋村】



▲大宜味村のマクの分布図

第二章

大宜味村各シマの宝物

田嘉里



【よみ】たかざと

【地域名】^{シマナー} ヤハムティ、ヤカムティ

【マク名】

クイシンヌマク（屋嘉比）

マラクイヌマク（親田）

ユフツパヌマク（見里）

ウチクイシンヌマク（野国、野国ナー）

フーシンヌマク（潮原）

ハニマンヌマク（福地）

屋嘉比ノ口管轄



名称 田嘉里集落センター（海拔 4 m）
 所在地 大宜味村字田嘉里 472 番地
 電話 0980-44-3026
 昭和 56 年 3 月 20 日竣工 RC 造 2 階
 （農業構造改善村落特別対策事業 65,649 千円）
 ※企業局支出金 16,407 千円
 平成 13 年度水源基金にて 2 階増築 27,915 千円
 平成 28 年 2 月末 人口 283 人（男 141・女 142） 135 世帯

一、田嘉里の概要

『沖繩の地名考』（宮城真治）によると、親田は親（ウエー）の敬称を付した地名、見里は「ミチャトウ」、もしくは「ンチャトウ」と呼び、港の義とされる。野国は広漠たる地を「ヌー」ということから野国の地名となったという。田嘉里は、親田（ウエーダ）、屋嘉比（ヤハビ）、見里（スンバル・ミサト）の三つの村（シマ）からなり、北は国頭村浜、南東は東村に接し、大宜味村の最北端に位置する。

一六七三年に田港間切が創設された頃、国頭間切に属し、一六九二年に田港間切は大宜味間切と改称されるが、三つの村は国頭間切のままである。屋嘉比村は『絵図郷村帳』（一六四九年）に記録されており、古琉球時代に形成された古い集落である。親田村、見里村は『琉球国由来記』（一七一三年）には国頭間切の村としてあり、十八世紀初頭には村として機能していたとみられる。但し、『琉球国旧記』（一七三一年）は、『琉球国由来記』を踏襲したもので、三つの邑（村）は国頭郡（間切）のままである。大宜味間切の村としての記録が見られるのは、『間切村名尽』（一七一九年）からとなる。

三つの村は、明治三六（一九〇三）年に三村が合併するまで続く。合併のとき、各村の名から一字ずつ取って田嘉里となった。明治四一年に大宜味間切は大宜味村（ソン）となり田嘉里村は字（アザ）田嘉里となる。

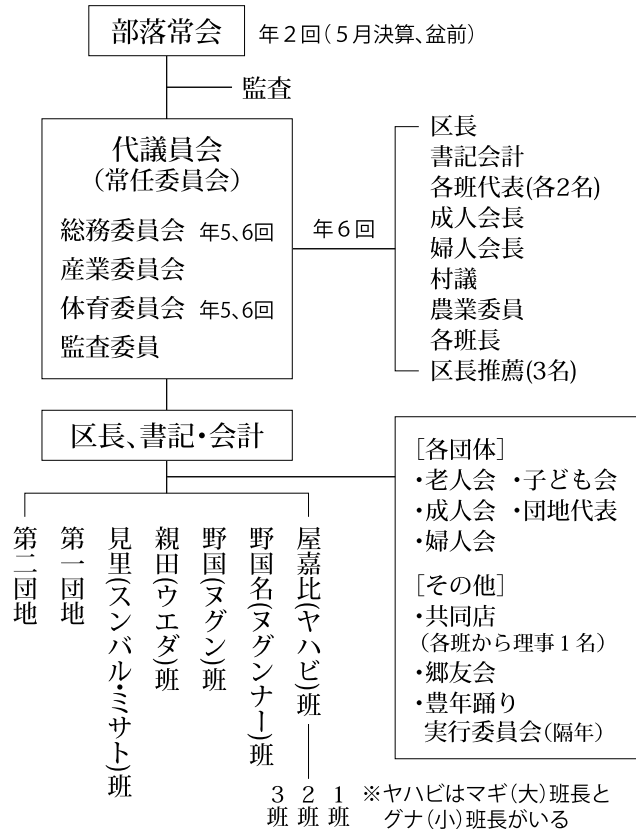
田嘉里の集落は、国道五八号沿いの浜部落から山手に約八〇〇メートル入った丘陵地帯の谷間にある。集落に入ると右側に根謝銘（ウイ）グスクがあり、集落の中に田嘉里川（屋嘉比川）が流れている。山地は国頭山地とその西側に開ける河岸段丘と丘陵地からなる。

『おもろこし』には、屋嘉比港が港として利用されていた状況が語られ、かつての河口は現在の河口から一キロメートル以上内陸に入った屋嘉比集落付近にあり、十七世紀の中ごろまでは高台にある小字屋嘉比上原の下まで山原船が入るぐらい川は広く、深かった。根謝銘（ウイ）グスクが利用されていた頃の港はこの地だったと考えられる。

当時、屋嘉比の港には沖繩本島周辺各地や、さらに奄美諸島との交易船が盛んに出入りし、大正期には山原船が停泊し、薪炭や木材を積み出していた。グスク時代の港は後世堆積して陸化し、上福地や中福地や前田などの小字名があり、かつて水田が開かれていた。

戦前は薪などの林産物が豊かな産地で知られ、終戦後も炭焼きに従事した人もいたが、現在は山の仕事は行われなくなり、サトウキビや果樹栽培が主

田嘉里の組織



田嘉里の行事

- 〈旧暦行事〉※現在神人不在(区で行っている)
- 旧三月 サンガツサンニチ※班ごと(三日)
 - 旧四月 アブシバレー※班ごと
 - 若草御願(アブシバレー翌日)
 - ウマチー(十五日)
 - 旧五月 チキスーミー・ミーメー(二五日)
 - 旧六月 海神祭(旧盆明け初亥)
 - 旧七月 ウスデーク(海神祭の翌日)
 - 旧八月 シバサシ※各自
 - 豊年踊り(隔年・十五夜の頃)
 - ウガンフセー(吉日)
 - 旧九月 タヒンネー折目(日(つちのと)の日)
 - 旧十一月 鬼餅(八日)
 - 旧十二月
- 〈新暦行事・活動〉
- 一月 生年祝い※各自(三日)
 - 三月 彼岸※各自(春分の日)
 - 四月 清明※各自(吉日)
 - 九月 彼岸※各自(秋分の日)



▲豊年踊りの様子

七、田嘉里の人口動態

田嘉里の戸数・人口は、明治末期から昭和三〇年代にかけてピークを迎え、徐々に減少に転ずるが、二〇〇一（平成十三）年と二〇〇七（平成十九）年に村営田嘉里団地が完成し、戸数、人口が増えている。

| 年 | 戸数（戸） | 計（人） | 人（男・女） | 内士族（戸・人） | |
|-------|-------|------|---------|----------|--|
| 明治 13 | 屋嘉比村 | 28 | 161 | 82・79 | |
| | 親田村 | 25 | 136 | 65・71 | |
| | 見里村 | 27 | 166 | 85・81 | |
| 明治 23 | 屋嘉比村 | 35 | 193 | 99・94 | |
| | 親田村 | 28 | 157 | 73・84 | |
| | 見里村 | 33 | 202 | 107・95 | |
| 明治 36 | 139 | 681 | 351・330 | 1・5 | |
| 大正 10 | 167 | 839 | — | | |
| 昭和 15 | — | — | — | | |
| 昭和 25 | — | — | — | | |
| 昭和 30 | 171 | 811 | — | | |
| 昭和 47 | 108 | 385 | — | | |
| 昭和 52 | 109 | 359 | 172・187 | | |
| 昭和 57 | 109 | 305 | 147・158 | | |
| 平成元年 | 111 | 286 | 132・154 | | |
| 平成 5 | 112 | 285 | 137・148 | | |
| 平成 10 | 106 | 293 | 138・155 | | |
| 平成 15 | 121 | 322 | 155・167 | | |
| 平成 20 | 133 | 330 | 167・163 | | |
| 平成 25 | 133 | 317 | 162・155 | | |
| 平成 26 | 132 | 293 | 151・142 | | |
| 平成 28 | 135 | 283 | 141・142 | | |

〔大宜味間切（親田、見里、屋嘉比）三ヶ村内法〕（明治十九年）

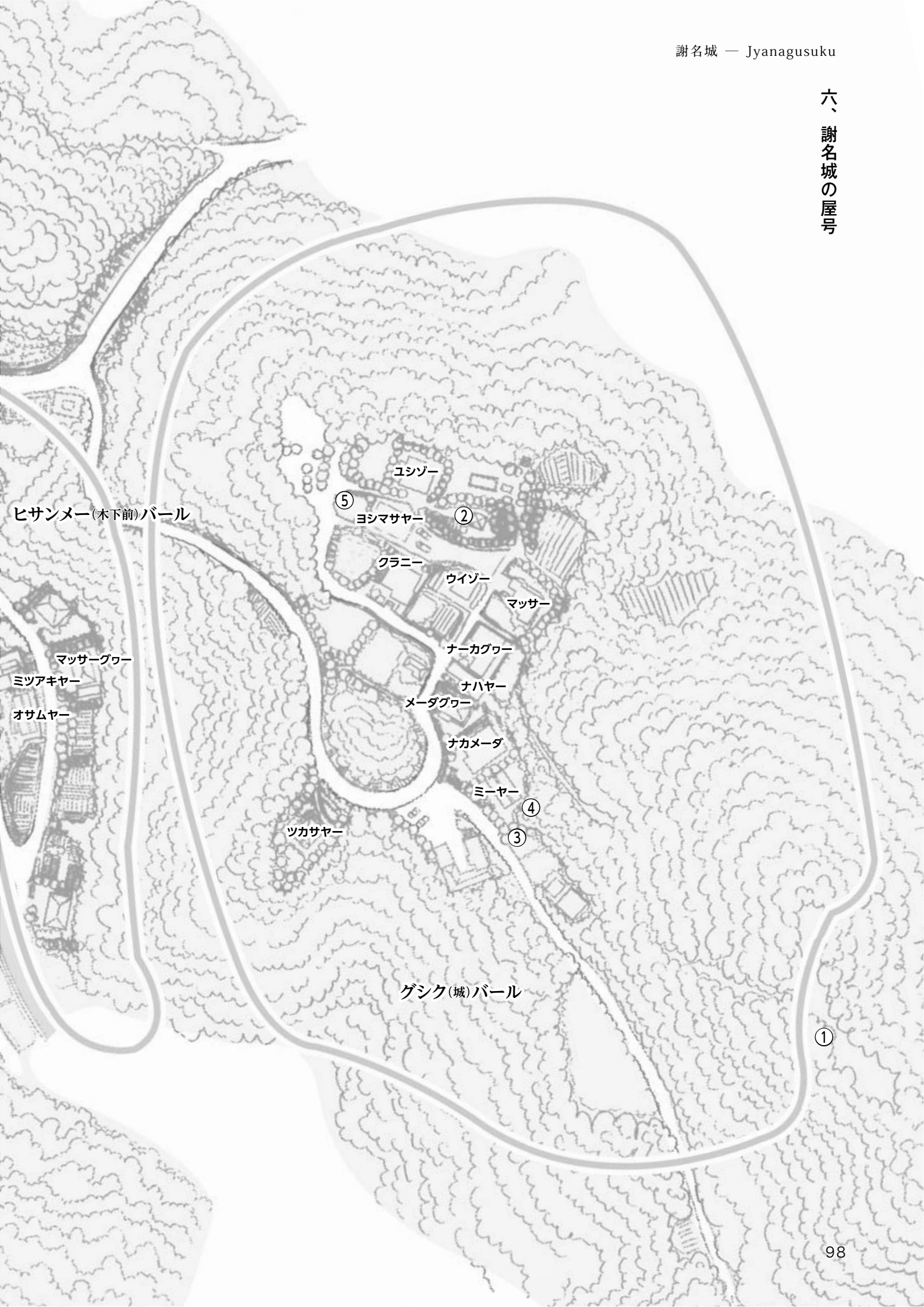
「大宜味間切内法」（百八条）は大宜味間切全体（塩屋村外十五）で執行される約束、取締まり書である。大宜味間切（親田、見里、屋嘉比）三ヶ村内法は三ヶ村の取り締まり、約束である。他人の作物を盗んだり損害を与えた場合、川の土手に牛を繋ぎ置く者、田植え後にエビや魚をとるために田に踏み入るなどの違反をした場合など罰金を科したりする取り締まり規則である。

- 一 他人ノ諸作物ヲ盗ミ取ルモノ
- 一 川面ニ牛繋ギ置クモノ
- 一 牛ノ他人ノ諸作物ニ害スルモノ
- 一 田方ニ稻植付後田魚セー等ヲ取ル為ニ田ニ踏ミ入ルモノ
- 一 締札ヲ渡ス時ニ両本ダンパン致シ村吏員親々集会ノ上勝負ヲ決シ一方ノ負けシ方ハ金貳円ノ科金ヲ徴収候事
- 一 右点々ニ違犯スルモノハ一日ニ科金壹銭ツ、徴収候事

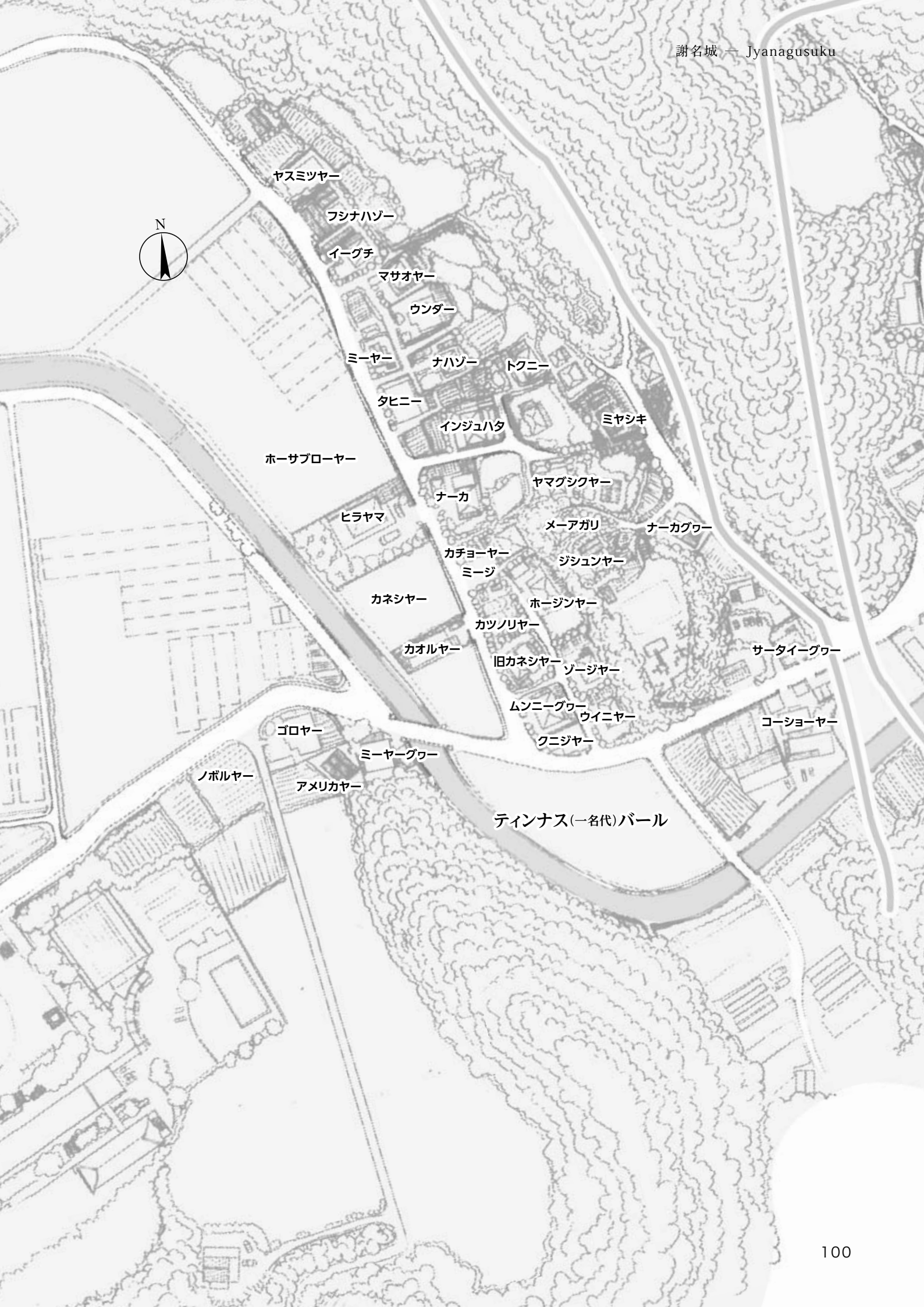
右箇条書之通禁止シ若シ違背ノモノハ締札ヲ渡壹日金壹銭ツ、ノ科金ヲ申付候尤モ右金収入方ハ一ケ年貳期ニテ収納シ村中各藍々へ相渡シ与々ニ於テ配当致候事

（『沖縄県史十四』）

六、謝名城の屋号



①



ヤスミツヤ

フシナハゾ

イーグチ

マサオヤ

ウンダー

ミーヤ

ナハゾ

トクニ

タヒニ

インジュハタ

ミヤシキ

ホーサブローヤ

ナーカ

ヤマグシヤ

ヒラヤマ

メーアガリ

ナーカグワ

カチョーヤ

ジシュンヤ

ミージ

カネシヤ

ホージンヤ

カオルヤ

カツノリヤ

サータイグワ

旧カネシヤ

ソージャ

ゴロヤ

ムンニグワ

ウイニヤ

コーショヤ

ノボルヤ

ミーヤグワ

クニジャ

アメリカヤ

ティンナス(一名代)バール

| 明治13年 | 村名 | 戸数(戸) | 計(人) | 人(男・女) | |
|-------|-------|-------|--------|---------|----------|
| | 一名代村 | 21 | 114 | 64・50 | |
| | 根謝銘村 | 37 | 183 | 92・91 | |
| | 城村 | 21 | 118 | 52・66 | |
| 明治23年 | 村名 | 戸数(戸) | 計(人) | 人(男・女) | |
| | 一名代村 | 21 | 119 | 65・54 | |
| | 根謝銘村 | 39 | 215 | 105・110 | |
| | 城村 | 25 | 126 | 60・66 | |
| 謝名城 | 年 | 戸数(戸) | 計(人) | 人(男・女) | 内土族(戸・人) |
| | 明治 36 | 101 | 607 | 305・302 | 6・36 |
| | 大正 10 | 111 | 599 | — | |
| | 昭和 15 | — | — | — | |
| | 昭和 25 | — | — | — | |
| | 昭和 30 | 120 | 506 | — | |
| | 昭和 47 | 104 | 318 | — | |
| | 昭和 52 | 98 | 262 | 98・164 | |
| | 昭和 57 | 94 | 217 | 79・138 | |
| | 平成元年 | 98 | 222 | 108・114 | |
| | 平成 5 | 103 | 228 | 116・112 | |
| | 平成 10 | 93 | 227 | 119・108 | |
| | 平成 15 | 93 | 203 | 106・97 | |
| | 平成 20 | 92 | 195 | 105・90 | |
| | 平成 25 | 100 | 202 | 109・93 | |
| 平成 26 | 99 | 195 | 106・89 | | |
| 平成 28 | 95 | 180 | 98・82 | | |

七、謝名城の人口動態

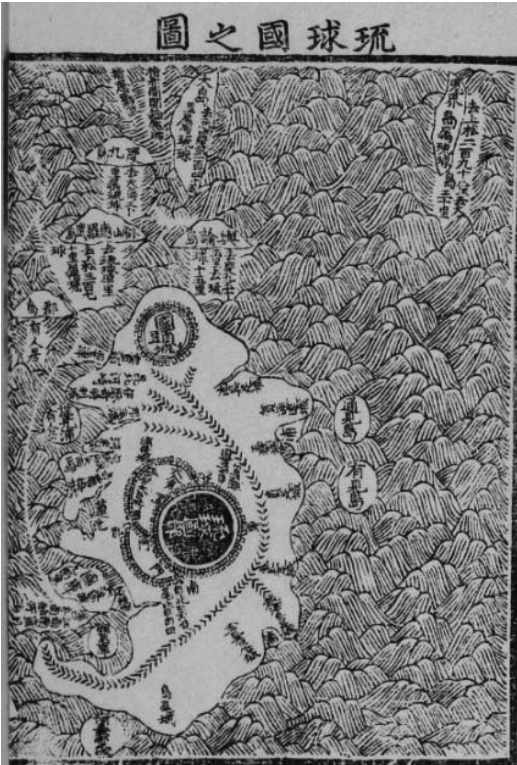
明治三六年に合併する以前の、根謝銘村と一名代村と城村の世帯数を見ると二十〜四十世帯、一〇〇〜二〇〇人足らずである。小規模な村であったことが、合併につながったとみられる。大宜味間切全体の土族の比率は十四パーセント、一一〇八人で、謝名城は三六人で六パーセント、土族の割合は非常に少ない。

八、謝名城の祭祀

国頭按司の居城とされる根謝銘(ウイ)グスクは、沖縄本島最北に位置し、一四世紀から一五世紀に機能した城塞的なグスクで、地元ではウイグスクと呼んでいる。『海東諸国紀』(一四七一年)に載る「琉球国之図」には、ひときわ大きな円形の城塞マークの中に「国頭城」と記載されており、これが根謝銘(ウイ)グスクではないかと考えられ、十六世紀前半の首里への按司集居までは、国頭地域の拠点だったと思われる。山原の歴史や文化を読み解く重要なキーポイントとなるグスクである。

城集落背後の標高約一〇〇メートルの舌状丘陵端に形成され、丘陵頂上部に古世紀石灰岩の割石で石塁を巡らし、尾根筋は人口の堀切で切断している。『おもろさうし』には、屋嘉比港が貿易港として栄えた時代を讃えたオモロが残されている。屋嘉比港は、根謝銘(ウイ)グスクの直近に位置し、グスクと対になる港としての役割を持っていたと考えられる。

屋嘉比川の河口にあたる国頭村浜は、一六七三年の田港間切創設時に、国頭間切番所が設置された地である。それ以前の国頭間切番所の位置は不明だが、根謝銘グスク周辺にあった国頭間切番所が、田港(後に大宜味)間切の新設によって浜村へ移動したのではないかと説もある。国頭間切には、間切の中心となる同名村(国頭ムラ)がないが、中心地だったインジャミ(根謝銘)から国頭(クンジャン)の漢字が充てられたと考えることもできる。



▲『海東諸国紀』琉球國之図のグスクを示す上の丸の中に「国頭城」とあるのが根謝銘グスクではないかといわれている

喜如嘉

【よみ】きじよか

【地域名】^{シマナー}キザハ・キジャハ・チジユカ

【マク名】クガニマク

城ノ口管轄



名称 喜如嘉公民館 (海拔 2.5m)
所在地 大宜味村字喜如嘉 777-1
電話 0980-44-3809
昭和 58 年 5 月 30 日竣工 RC 造 2 階
(国庫 32,000 千円、水源基金 45,400 千円、
村 1,085 千円、区 13,000 千円 計 91,485 千円)
平成 28 年 2 月末 人口 420 人 (男 209・女 211) 216 世帯



一、喜如嘉の概要

喜如嘉の集落は大川下流域に位置している。元々は国頭間切に属していたが、一六七三年に田港間切に編入され、一六九二年に大宜味間切と改称、同間切の村となった。集落の南西部の海浜砂丘からは、沖縄貝塚時代後期の土器や貝製品が大量に出土している(喜如嘉貝塚)。また、喜如嘉村は、『絵図郷村帳』(一六四九年)に記録されており、それ以前の『おもろさうし』に「きどかさ」と謡われている。クガニマクのマク名があり、ムラの古さが窺われる。

『おもろさうし』卷十三の二二三—No.九六八に「ゆらぶさか(ユラフサ「神女」が)／けおのおれの さうしや(今日の天降りの嬉しさ)／なさいきよもいみおもかけ 達ちへ(なさい子「父老こ」按司的な人物)のみ面影がたつて)／又 きとかさに けさけらへ ありより(喜如嘉に昔からの古い建物がある)／又 くにかさか ゑんけらへ ありより(クニカサ「神女」の立派な建物がある)／又 わかのろか けおのおれの さうしや(若ノ口が今日の天降りの嬉しさよ)／又 きちよかさに うち人 もちなし なさいきよもい(喜如嘉に神女官をもてなし 父老さま)とある。キトカサは『琉球国由来記』(二七二三年)の喜如嘉村に「キトカサネ森 神名 七嶽ノイヘナヌシ」と記されることから、「きとかさに」および「きちよかさに」は喜如嘉の古名と考えられる。

祭祀の場としてキトカサネ森があり、当村の神アシャゲ(アサギ)は城ノ口が祭祀を司っていた(『琉球国由来記』。歌謡の「新しく神になった人へのオモロ」および「死んだ神人へ送るオモロ」に喜如嘉のマキヨ名である「クガニマク」(黄金マキヨ)がみえ、当地にはシマ(村落)の創生を謡った貴重な神歌「柴差しのウムイ」が伝わっている。

拜所にはヒンバマイや七滝がある。ヒンバマイは展望のよい公園として集落では大切にされ、聖域である七滝一帯は樹木の伐採が禁じられている。ウンガミには、根謝銘(ウイ)グスクでの祭祀に神役が参加した後、ヒンバマイで七滝、根謝銘(ウイ)グスクへ遙拝をおこなっていた。

喜如嘉は居住域と河川を含めた農地、山、海等の自然域がコンパクトにまとまり調和を見せる集落である。「芭蕉布の里」を象徴する芭蕉が至る所に植えられ、赤瓦民家やフクギ並木の集落道と共に、沖縄の原風景が感じられる。

集落の前面は、かつては美田地帯で知られ、地元では「喜如嘉ターブク(田圃)」と呼ばれ親しまれている。またターブクの一帯は東シナ海が湾入りした

入江で山原船の出入りもあったという。七つの泉から湧き出るといふ名泉七滝に水源を発するといわれる、喜如嘉タープクを前にそびえるヒンバ森は風光に恵まれ情緒に富んだ絶景。放浪の詩人池宮城積宝がつづった「ああ喜如嘉かの山村に 生まれなば 少しこの世が 楽しくありけむ」の歌碑もある。

喜如嘉の芭蕉布は、大宜味バサーと呼ばれ、一時衰退したが平良敏子さんを中心とする女性達が織り手になって再興させた。一九七四（昭和四九）年に国の重要無形文化財に総合指定され、二〇〇〇（平成十二）年には平良敏子さんが人間国宝に認定された。現在では県内外から多くの伝承生が集まり芭蕉布技術の習得に励んでいる。字内には村立芭蕉布会館があり、芭蕉布製品、製造工程の展示や、作業の見学もできるようになっている。

以前はビーク（い草）栽培が盛んで、畳表の蒔製造もおこなわれていたが、現在は生花用のフトイやオクラレルカ等の花卉類に移行している。狭い耕地ながら米、いも、キビ、パイン、茶、シークワーサーなどの栽培が盛んだった。



▲赤瓦に芭蕉が映える

また、喜如嘉板敷海岸の板干瀬（イタビシ）も貴重な資源である。先人達は屋敷囲いの材として板干瀬を利用し、集落にはそのような屋敷囲いも残る。隔年に開催される喜如嘉まつりでは、各家に代々伝わる芭蕉布をまとった女性達が、輪になって踊る臼太鼓とエイサーが行われる。

喜如嘉を語るときに忘れてならないのは、一九三一（昭和六）年に起こった村政革新運動である。「ソテツ地獄」といわれた全県的な経済不況を背景に、当時高まりを見せていた社会主義思想の影響も加わり、喜如嘉の青年男女が中心となって、師範学校、農林、中学在学中の学生達や、遠く県外海外の出稼ぎ者からの支援なども得て、組織的運動へと発展していった。沖縄全県に波紋を起こしたこの運動も、やがて官憲による弾圧により、一部は牢獄に繋がれ、多くの青年達が村にいたたまれず各地に散って行き、翌昭和七年六月頃には終息へと向かっていった。

喜如嘉は浦添と並び「チュウムラ」（強い村）と呼ばれ、各界に数多くの人材を出した誇り高き集落である。特に医療界で活躍している人だけでも二十人に及び、同村出身医療者の三分の二を占めていた。その頂点に立っていたのが、明治三十一年同字に診療所を開設し、その後、読谷山村医・大宜味村医・国頭村医を歴任した平良真順氏である。平良氏は、戦前県会議員に五回当選、議長を二期務めた程の大物であった。九十二歳までかくしゃくとしていた。

また、同字出身医師のうち十二人が平良氏の子孫、婿にあたり、沖縄医療界の長老金城清松医博は同氏の甥である。

公務員では中央巡裁判事前田武行氏ら二十七人をはじめ教育関係の元喜如嘉小中学校長平良景太郎氏、中央教育委員平良仁一氏、那覇区教育委員高原久勝氏、沖縄教職員会の政経副部長福地曠昭氏ら五十人余、上里春生とともに村政革新運動を展開し、後に沖縄社大党幹部、立法院議員も務めた山城善光氏の他、銀行や会社関係など産業界に多数の人材を輩出している。

一九九六（平成八）年に『喜如嘉誌』（字誌）が発行されている。



▲うりずんの頃、オクラレルカが咲き始めると喜如嘉タープクは一面薄紫に染まる

大兼久

【よみ】おおがねく

【地域名】^{シマナー}ハニク・ウフガニク

【マク名】ユアギマク

城ノ口管轄



名称 大兼久公民館 (海拔 4 m)
所在地 大宜味村字大兼久 30 番地
平成 14 年 4 月 13 日落成 RC 造 2 階
(水源基金 66,359 千円) ※共同店含む
平成 28 年 2 月末 人口 118 人 (男 56・女 62) 59 世帯



一、大兼久の概要

大兼久は村の中央部に位置し、大兼久川を境に字大宜味と接する。大兼久川の右岸に位置し、北は東シナ海に面する。兼久は砂地に由来する名称で、海浜に立地する場所に多い地名である。

一九二一（大正十）年に字大宜味からムラ分かれし、独自の自治活動を発したが、一九四六（昭和二一）年には小字が大字大兼久に地籍変更され行政区となった。大宜味から分かれた関係にあり、昭和二一年以前の歴史は大宜味と同一である。また、伝統的な行事は全て一緒にを行っている。

大宜味村（ムラ）が登場するのは、一七一三年に編纂された『琉球国由来記』が最初である。十八世紀初頭には大宜味村（ムラ）に間切番所が設置され、一時大宜味間切の中心だったが、その後番所は塩屋村へ移転した。明治末期に大宜味村役場が塩屋村から移転し、一九二五（大正十四）年に旧役場庁舎が完成して以来、村の行政の中心地となっている。

大兼久では明治末期から追い込み漁を導入して以来、漁業が盛んになり、昭和初期には南洋諸島まで進出し、糸満、本部に次ぐ漁獲高を誇り、当時は漁業の村として知られていた。

大宜味・大兼久は、元は一つの村（ムラ）だったことから、拝所や神人も共通し、年中行事を共同で行うものも多く、豊年祭は特に盛大に行われる。合同の行事では、まず大兼久の拝所を巡った後、大宜味と合流し、大宜味内の拝所を巡る。大宜味御獄が大宜味・大兼久の共同の鎮守の森である。

旧盆翌日の十六日には、ゾーガリー（門嘉例）という大兼久だけの行事がある。この行事は大宜味に間切番所があった頃、大兼久の浜辺から出航した上納船の航海安全と、来年の豊作を祈願したことに由来しており、中の門（ナハンゾー）や穴川（アナガー）で祈願する。

大兼久にある旧大宜味村役場庁舎は、一九二五（大正十四）年に建てられた現存する県内最古の鉄筋コンクリート造の建築物で、建築技術の導入や構造法の歴史を知る上で貴重とされ、県の文化財に指定されている。字大宜味とは大兼久川を境に行政区を分かつようになったが、村役所、農協が大兼久で、郵便局が字大宜味にあり、両字とも村行政の中心地である。

『沖繩タイムス—ふるさと—の顔（昭和四十年）』の記事によると、大兼久は昔、村一番の貧乏部落だった。分家の悲しさで耕地もほとんどなく、どの家もその日その日の生活をどうにか切り抜けているといった状態で、明治の末頃から大正の初めにかけて、七人の若者が糸満漁夫に身売りされた。この七人の

塩屋

【よみ】しおや

【地域名】サー・スヤ
シマナー

【マク名】ユアギマク

田港ノ口管轄（四ヶ字）



名称 塩屋区農村集落管理施設（海拔 1.5m）
所在地 大宜味村字塩屋 371-2 番地
電話 0980-44-2453
平成 15 年 3 月 28 日竣工 RC 造 1 階
（国庫 75,765 千円、水源基金 14,824 千円）
平成 28 年 2 月末 人口 574 人（男 292・女 282） 257 世帯



一、塩屋の概要

村の中央部の塩屋湾口の突き出た砂州上に立地し、村内で最も人口の多い集落である。サーやスヤと呼ばれ、「製塩の地」に由来する。ムラ発祥のマク名はユアギマクで「砂がより上げた地」である。

一六七三年に田港間切が創設されるまでは国頭間切に属し、同年に国頭間切から田港間切に編入され、一六九二年より大宜味間切となった。間切番所は、まず田港村に置かれ、一六九二年に大宜味村へ移転、さらに塩屋村に移っており、一六九五年頃から一九〇八（明治四一）年までは塩屋村が間切行政の中心地だった。

集落中央にそびえるハーミンジョーの森は、もとは一小島にしてその東側の砂地（平地）は塩田であったと思われる。アサギマー近くに塩焚きの窯に使った焼石がいくつもあり、またスーグチ（潮口）もあり、付近に塩田があったことを示している。それらの史実は古典劇作家、高宮城親雲上が著した組踊り「花売りの縁」の主人公森川之子の伝説にもつながってくる。

塩屋港は古くから陸上・海上交通の要所であり、大宜味間切の王府への貢納物は塩屋村に集積され、今帰仁の運天港を経て、さらに那覇港や泊港へと運ばれた。

宮城島と白浜の森によって風波がさえぎられ、穏やかな湖を思わせる塩屋湾は、昭和の初め頃、カキ養殖が試みられたが、台風に対する十分な備えがなかったことから失敗する業者が多く、戦後も台風の被害と赤土流出により根付かせることができなかった。

一九六〇（昭和三五）年頃まで、集落背後の山は、山頂まで傾斜の急な段畑だった。山手一帯はかつての水田跡で立枡（タチマシ）と呼ばれている。また、大保集落の潟原の両岸にも塩屋の人の所有する水田があり、舟で通い耕作していたという。

沖縄では珍しい牧場が古くからあり、戦前は常時九十頭ぐらいたった牛が、終戦の混乱によって盗まれ、衰退しかかっていたが、組合員三六人の牧場組合は、押川の近くに四八町歩の土地を有し、イノシシの被害に悩まされる段々畑に牛を入れる計画をするなど奮闘していたが、一九六〇（昭和三五）年頃までにはなくなり、ボクジョウ（牧場）の小地名に当時の名残を見るのみである。

その頃の産業は農業と漁業が中心で、やんばる名物の段々畑は同字が最も多く、集落後方の山嶺まで連なる段々畑は風情があり、シークワサーをは

謝 辞

「大宜味村の自然」として大宜味村全体の地形図、地質図、植生図及び、各字の地形・地質、植生・土地利用図を用いて、視覚的にわかりやすく、自然を身近なものとして親しめるように、安座間安史氏（村史編纂委員）に執筆いただいた。

本編の第一章は「大宜味村のムラの宝物」とし、大宜味村の遺跡、大宜味村内のマク、大宜味間切の村の変遷、史料にみる大宜味のムラの変遷、大宜味間切の村と役人、根謝銘（ウイ）グスクと按司地頭と総地頭、根謝銘（ウイ）グスクの御嶽とイベ、国頭（クンジャン）は根謝銘（インジャミ）？、根謝銘（ウイ）グスクと集落と村（ムラ）、近世の山原の方切、間切番所の移転、元文検地の印部石（ハル石）、間切役人と地租徴収の続き、大宜味間切の杣山の種類、大宜味間切における猪垣の修築、耕作下知方並諸物作付節附帳、田港御嶽と大宜味御嶽の祠の香炉、明治の大宜味間切、『南嶋探険』（笹森儀助）、大宜味間切の宿道、大宜味間切のノロの遺品、大宜味間切の神アサギ、明治初期の大宜味間切の村の規模、歴史年表を掲げ構成してあります。

大宜味村や国頭村では、今もなおマク概念が生きており、遺跡や遺物散布地からマクへ、マクから古琉球のムラへ、薩摩の琉球侵攻後、慶長検地が行われ村位が定められ、古琉球の緩やかなムラとは異なる近世の村（地割・村に税を課す）となる。大宜味村にはマクから古琉球の村、そして近世の村への変遷を知る手がかりが残っています。大宜味の村の変遷は、国頭間切から大宜味間切の分割、羽地間切からの統合、間切番所の移転、田嘉里、城、田港、津波の四名のノロの存在が、管轄村、祭祀の面を特徴づけており、元文検地の印部石の原名と現在の原（小字）の変遷をたどってみることで、明治以前の「大宜味の世界」が見えてきます。

第二章は、村内の十七のムラ（字）を北から田嘉里、謝名城、喜如嘉、饒波、大兼久、大宜味、根路銘、上原、塩屋、屋古、田港、押川、大保、白浜、宮城、江州、津波の順で配列し、概要、各字の自然、遺跡（散布地）、ムラ名の変遷、小字・小地名、屋号図、人口動態、祭祀、むかし話・伝承・うた、コラム、各字の年表と十一の項目で構成し、大宜味村の隅々まで踏査した形となります。各字それぞれ

れの歴史をもち、個性あるムラをつくり出していることがわかります。

本編の発刊に至る過程で、写真や図が持っている資料の提供、屋号調査や小字・地名の確認にも区長さんや区民みなさんの手をわずらわせました。また、印部石（ハル石）の提供、ノロ家の遺品、明治の辞令書など、数多くの資料や情報の提供がありました。福地廣昭氏の『イギミの里・地名考―ふあるやま』をはじめ発刊されている字誌、宮城昭氏（塩屋）から印部石や塩田の見取り図などの提供があり、活用させていただきました。本編ではその一部しか紹介できませんでしたが、「大宜味村には姿を見せない宝物」が数多くあることに気づかされました。ご協力ありがとうございました。今後ともご協力ご支援よろしくお願い致します。

本編の発刊に向けて、村史編纂室の働きを見ました。原稿打ちから編集、図の作成、小字、屋号の調査や確認、ノロ殿内の遺品の調査、印部石の確認など、大宜味村の十七の字の隅々、そして字の歴史年表を整理しながら歴史を肌で感じ取る作業をしてくれました。その作業は本編の発刊で終わりではなく、収録できなかった項目も数多くあり、本編は大宜味村を見きわめていく基本的な資料とテーマが提供されたものと考えてくだされば幸いです。そして、各々のテーマを深めていく、村民の学びの手がかりとなり、情報提供として活用してくだされば幸いです。

また、字別の原稿校正を重ねていく過程で、編纂室の一人ひとりが大宜味村のムラのことを知り好きになり、自分のものにしていく姿は、村史づくりは村の土台づくりであり、人づくりとして大きく貢献していることを実感させられています。編纂室の三名の職員の涙ぐましいほどの取り組みには頭が下がります。これをもって部会長の謝辞といたします。

平成二八年三月二八日

大宜味村史編纂委員会 シマジマ専門部会部会長 仲原 弘哲

参考文献（『資料名』 著者（発行者） 発刊年）

- 『大宜味村史 通史・資料編』 大宜味村役場 一九七九年
『新大宜味村史シマツマビジュアル版』 大宜味村役場 二〇一四年
『新大宜味村史 戦争証言集 渡し番 ―語り継ぐ戦場の記憶―』 大宜味村役場 二〇一五年
『大宜味村議会史』 大宜味村議会 二〇〇六年
『大宜味村文化財調査報告書第一集 喜如嘉貝塚』 大宜味村教育委員会 一九七九年
『大宜味村文化財調査報告書第二集 大宜味村の遺跡』 大宜味村教育委員会 一九八四年
『大宜味村文化財調査報告書第三集 大宜味村の猪垣』 大宜味村教育委員会 一九九四年
『大宜味村文化財調査報告書第六集 大保川上流域の生産遺跡群』 大宜味村教育委員会 二〇〇九年
『大宜味村文化財調査報告書第八集 大保川上流根路銘棚原山の生産遺跡』 大宜味村教育委員会 二〇一〇年
『大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業報告書』 大宜味村教育委員会 二〇一〇年
『大宜味村の自然』 大宜味村教育委員会 二〇一〇年
『大宜味村の自然「普及版」おおぎみの自然』 大宜味村教育委員会 一九九七年
『おおぎみの昔話』 大宜味村教育委員会 一九八〇年
『大宜味村村勢要覧』 大宜味村企画観光課 二〇一二年
『東村史 第一巻 通史編』 東村史編集委員会・東村役場 一九八七年
『国頭村史』 国頭村役所 一九六七年
『喜如嘉誌』 喜如嘉誌編集委員会 一九九六年
『喜如嘉の写真集―写真で知る喜如嘉のあゆみ』 喜如嘉誌編集委員会 一九九五年
『大宜味村 饒波誌』 饒波誌編集委員会 二〇〇五年
『大兼久誌』 大宜味村大兼久区 一九九一年
『鎮守の里 大宜味字誌』 宮城長信・大宜味区 二〇一二年
『根路銘誌』 大宜味村根路銘区 一九八五年
『ふるさとテイサガ記念誌』 大宜味村字上原・天作賀会 一九九七年
『塩屋誌』 塩屋誌編集委員会 二〇〇三年
『塩屋・ウングミ』 塩屋ウングミ刊行委員会 一九八六年
『大保川の流れとともに 大保誌』 字誌編纂委員会 二〇〇六年
『大宜味村 津波誌』 大宜味村津波区 二〇〇四年
『本橋架設陳情書』 宮城区 一九五〇年
『牛御願帳』 津波区 年代不明
『沖繩縣国頭郡大宜味村製塩地略図（宮城島）』 たばこと塩の博物館所蔵 一九二八年
『沖繩県国頭郡志』 国頭郡教育会 一九五六年
『沖繩県史 第十一巻 資料編一上杉県令関係日誌』 琉球政府 一九六五年
『沖繩県史 二十一巻 資料編十一 旧慣調査資料』 琉球政府文京局 一九六八年
『沖繩北部のウングミ 関連資料』 沖繩県教育委員会 一九九四年
『沖繩県歴史の道調査報告書 国頭・中頭方西海道・Ⅱ』 沖繩県教育委員会 一九八六年
『沖繩県災害誌』 沖繩県総務部消防防災課 一九七七年
『日本復帰三〇周年記念特別展 資料に見る沖繩の歴史』 沖繩県 二〇〇二年
『北部国道三〇年のあゆみ』 内閣府沖繩総合事務局北部国道事務所 二〇〇三年
『塩屋橋物語―心の遺産』 沖繩総合事務局北部国道事務所 二〇〇〇年
『沖繩大百科事典（上・中・下）』 沖繩タイムス社 一九八三年
『那覇市史 資料編第一巻十琉球資料（上）』 那覇市役所 一九八九年
『角川日本地名大辞典四七沖繩県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 二〇〇九年
『訳註 球陽 全』 桑江克英訳 一九六九年
『沖繩文化史料集成五 球陽 読み下し編』 球陽研究会編 一九七四年
『校本 おもろさうし』 仲原善忠 一九七二年
『琉球史料叢書 第一巻く三巻』 横山重 一九七二年
『南嶋探験―琉球漫遊記』 笹森儀助著・東喜望校注 一九八二年
『林政八書』 島袋源一郎 一九三四年
『古層の村・沖繩民俗文化論』 仲松弥秀 一九七九年
『ペリー提督日本遠征記』 法政大学出版局 一九五三年
『ペリー提督沖繩訪問記』 外間政章 一九六二年
『沖繩国頭の村落（上巻）・（下巻）』 津波高志他 一九八二年
『田嘉里の歴史』 安里有三 一九九〇年
『シマフユトウバ 大宜味村田嘉里の方言』 宮城新八 二〇〇〇年
『おきなわ 大宜味村 謝名城の民俗』 新城真恵 一九八五年
『大宜味村謝名城の豊年祭について』（寄稿） 博友第二二二号 創立三〇周年記念号 前田朝達 二〇一〇年
『沖繩地名考』 宮城真治 一九九二年
『南島の地名 第五集』 南島地名研究センター 一九九八年
『沖繩県の地名』 高良倉吉 二〇〇二年

